

# 紀要

# 39

- 高島市仏性寺遺跡出土縄文土器の再検討(1)…………… 小島 孝修 (1)
- 布留式併行期の受口状口縁甕について…………… 伊庭 功 (15)
- 市三宅東遺跡の鏃形石製品とその意義…………… 宮村 誠二 (25)
- 滋賀県内の出土事例からみた斎串の一例について  
—上御殿遺跡の調査成果から—…………… 中村 智孝 (35)
- 滋賀県内における猿投窯産須恵器の流入  
—貯蔵器種を中心に—…………… 高島 悠希 (41)
- 条里地割からみる佐和山城下町の形成過程…………… 山口 誠司 (53)
- 三次元計測の実験的試行  
—等高線図の作成とオルソ画像の作成—…………… 福井 知樹・三好 佑佳 (62)

## 高島市仏性寺遺跡出土縄文土器の再検討（1）

小島孝修

### 目次

1. はじめに
2. 仏性寺遺跡と調査の概要
3. 仏性寺遺跡出土縄文土器の再実測
4. おわりに

### — 論文要旨 —

高島市マキノ町蛭口に所在する仏性寺遺跡では、昭和53年(1978)に試掘調査・発掘調査が行われ、縄文時代後期前葉～中葉の遺物包含層が検出された。出土した縄文土器や分銅形土偶などの遺物は、翌年に刊行された調査報告書に掲載され、滋賀県湖西北部地域では数少ない縄文時代後期前半の良好な資料として注目される。しかし一方で、現在の視点でその報告書を見直すと、縄文土器の実測図から得られる情報とに実際の遺物から得られる情報との間に乖離がみられるものが少なからず見受けられた。したがって本稿では、これらのうちの一部、おもに縄文時代後期初頭の縄文土器について改めて実測を行い、かつ当該期の未報告資料についても実測し、あわせてそれらの諸特徴について、より詳細な記述に努めることとした。

### ——— キーワード

縄文時代後期初頭 湖西北部地域 縄文土器 中津式 福田KⅡ式 縁帯文成立期 磨消縄文

## 1.はじめに

仏性寺遺跡は、高島市マキノ町蛭口に所在する。昭和53年(1978)に、滋賀県教育委員会と当協会がほ場遺跡事業に伴って試掘調査・発掘調査を行ったところ、そのうちの第54トレンチ(54T)で縄文時代後期初頭～中葉の遺物包含層を検出した〔滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1979〕(以下これを「前報告」とする)。

筆者は、この仏性寺遺跡第54トレンチの遺物包含層から出土した縄文土器群が、滋賀県湖西北部地域では数少ない縄文時代後期前半の良好な資料であることから、別稿〔小島2026〕の準備のために熟覧したのだが、「前報告」に掲載された実測図から得られる情報と実際の遺物から得られる情報との間に、乖離が生じているものが少なからず見受けられた。さらに、掲載図の縮尺が4分の1であることや、写真図版が掲載されていないことも、この乖離を増幅させる要因となっていた。また、実測対象に抽出されなかった資料中にも、公表すべき資料が多数含まれていた。

以上のことから、これらの縄文土器群の再実測の必要性を強く感じたため、縄文時代後期初頭のものを中心に、改めて実測を行い、本誌で公表することとした。あわせて、「前報告」では簡潔な表現にとどまっていた各個体の特徴を、より詳細に検討し、記述することとした。

なお、本稿の標題には(1)を付けたが、これは今後継続することも視野に入れているからである。すなわち、仏性寺遺跡第54トレンチから出土した縄文土器の主体となる時期は、本稿で扱った縄文時代後期初頭ではなく、縄文時代後期前葉～中葉の北白川上層式であり、今回扱わなかった土器群についても、今後できれば同様の再検討を行いたいと考えている。

## 2. 仏性寺遺跡と調査の概要

### (1) 仏性寺遺跡の概要(図1)

仏性寺遺跡は、知内川と生来川が形成した氾濫平野に立地し、地形は南東に向けてゆるく傾斜する。現況は水田として利用され、地表面の標高は90m前後であり、地下湧水が豊富である。縄文時代の集落跡として周知されているほか〔滋賀県文化スポーツ部文化財保護課2022〕、遺跡名が示す通り、古代寺院の存在が伝えられている。しかし、寺院に関する遺構・遺物はこれまでに見つかっていない。

周辺の縄文時代遺跡には、上開田遺跡・辻遺跡・蛭口遺跡がある〔小島1998〕。どの遺跡も仏性寺遺跡とは異なり、その上流側の扇状地に立地する。このうち、上開田遺跡は、仏性寺遺跡とはほぼ同時期には場整備事業に伴って滋賀県教育委員会と当協会が発掘調査を行い、縄文時代後期初頭～中葉の遺物包含層を検出した〔滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1980〕。そのほかの2遺跡については、縄文土器が出土したとされるが、詳細は不明である。

### (2) 調査の概要(図2)

昭和53年の調査は、調査対象地全域で54ヶ所の試掘坑を設け、遺構・遺物の有無を確認している。第54トレンチ以外の複数個所の試掘坑で、弥生時代から近代にかけての土器や木製品が出土している。とくに第8トレンチでは斎串が出土しているというが、実測図・写真は示されていない。このほか別稿で、この調査終了後に地元民から届けられたという、弥生時代～古代の所産と思われる木製品の足が報告されている〔山口1979〕。ただし、今回の熟覧でこれら縄文時代以外の遺物については確認していない。

第54トレンチでは、前述のように縄文時代後期初頭～中葉の遺物包含層を検出した。層序は、第1層の耕作土以下、中世の土師質土器の小皿小片をごく少量含む第2層の茶褐色スクモ、第3a層の若干スクモが混じる灰褐色シルト、第3b層の淡灰色シルト、第4層の青灰色粘土が堆積し、その下に遺物包含層である第5層の黒灰色粘土が堆積する。この黒灰色粘土は厚さ最大0.4mを測り、その上面は標高87.9～88.7mである。黒灰色粘土の下は淡青灰色粘土が堆積し、その下が基盤層の砂層である。遺物包含層の黒灰色粘土と淡青灰色粘土・基盤層は、地形とは逆方向の北に向けて傾斜する。また、基盤層上面で遺構は検出されていない。

### (3) 黒灰色粘土出土資料の概要(図3)

黒灰色粘土から出土した資料群は、湖西北部地域では比較的まとまった縄文時代後期初頭～中葉の土器群である。このため「前報告」では、前述した上開田遺跡や高島市旧今津町北仰遺跡(現北仰西海道遺跡)の資料群とあわせて、現高島市域(湖西北部地域)における縄文時代後期土器の編年表を別図で添付している(図3に再掲載)。資料が少ない当時あっては、意欲的な試みであった。また、縄文土器の一部は、中津式の代表的な土器としても取り扱われている〔石田2008〕。

また、これらの縄文土器には、遺存状態が良好なものが多く見られた。すなわち、破断面の磨滅が少なく、かつ器面における施文や調整痕が明瞭に観察できる資料が多く存在するのである。これは、一つには地下湧水が豊富な地質でかつ粘土に包含されていたという土地条件が関係していると思われる。そしてもう一つには、原位置から大きく移動していないことが関係していると思われる。ただし、後者に関しては、生活域(居住地)の場所をどこに想定するか、という問題も絡んでくるだろう。

第54トレンチからは、縄文土器のほか14点の石器(磨製石斧3点・打製石斧4点・石錘5点・磨石類2点)が出土している。また、縄文時代後期初頭の関西地方に特有の分銅形土偶も出土していて、仏性寺遺跡は、どちらかといえばこの土偶が出土した遺跡としてよく知られている〔中村・小島1997〕。

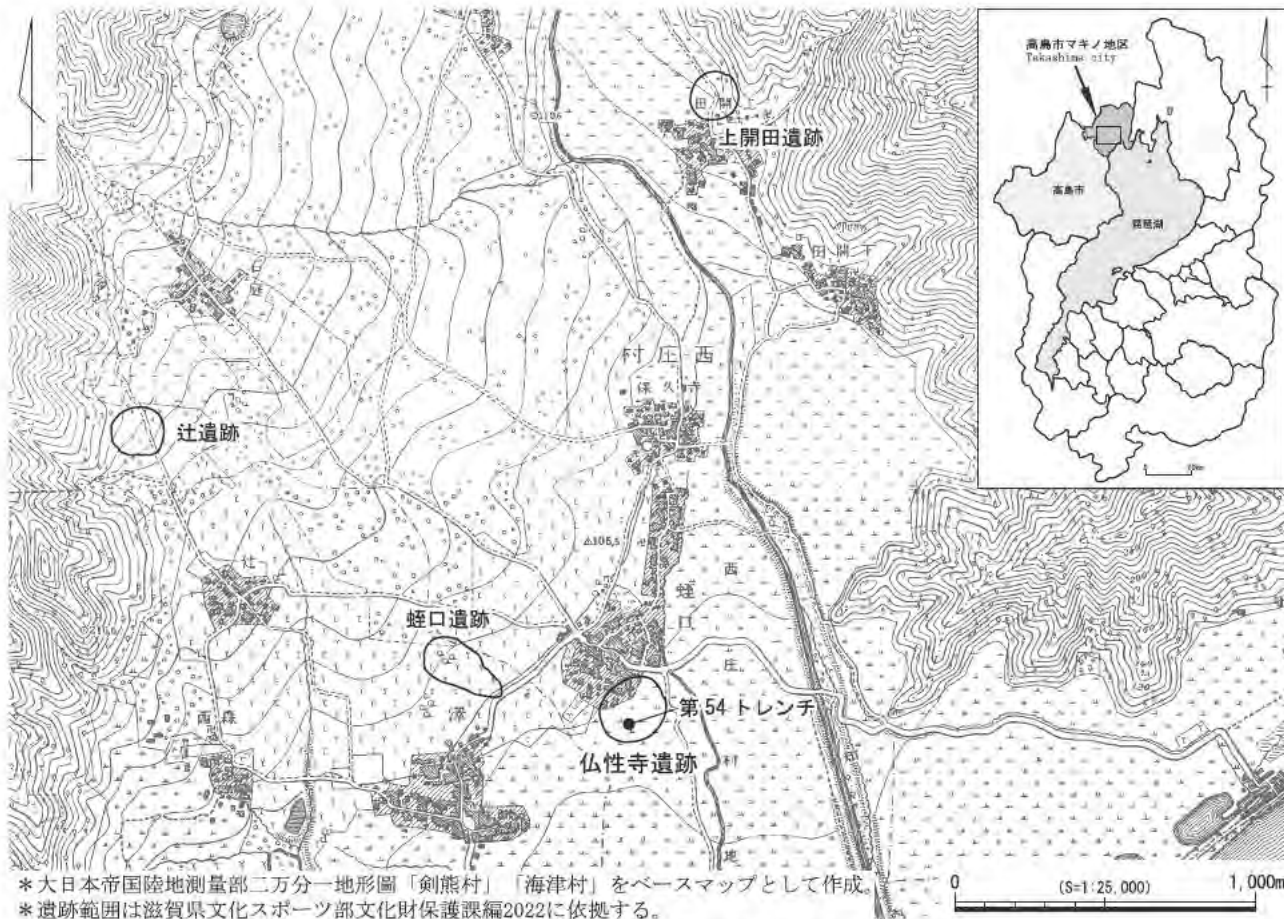
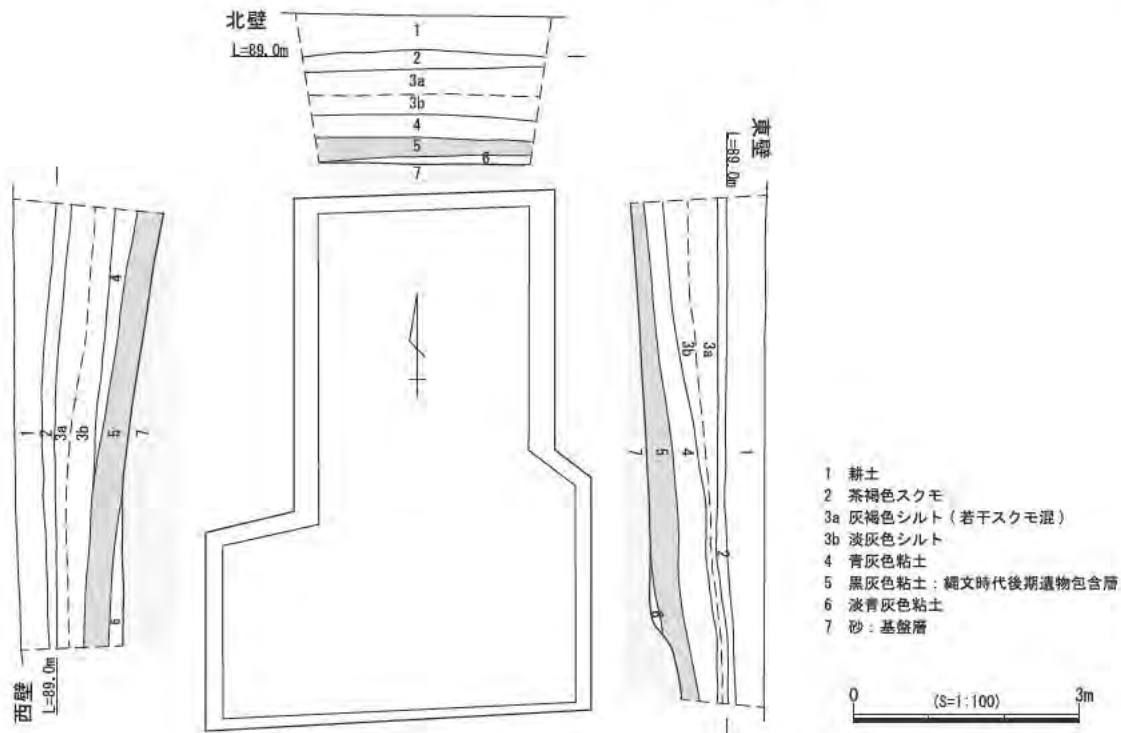


図1 仏性寺遺跡および周辺縄文時代遺跡位置図



\*滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1979掲載図および報告文から筆者が再構成。

図2 仏性寺遺跡第54トレンチ 模式図



\*滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1979より25%縮小して転載、原図の各縄文土器の縮尺はS=1:4。

図3 仏性寺遺跡調査報告 付図「高島郡内縄文時代後期土器編年表」

(4) 当該資料熟覧および報告の経緯(図4)

筆者は、これら縄文土器の熟覧を、調査報告書未掲載資料、未抽出分も含めて滋賀県埋蔵文化財センターに申請した。すると、滋賀県埋蔵文化財センターには、調査報告書に掲載された資料の一部と、遺物収納用コンテナ3箱分の未掲載縄文土器のみが収蔵されていて、そのほかの調査報告書掲載資料は、滋賀県立安土城考古博物館の所蔵になっている、とのことであった。そのため、改めて滋賀県立安土城考古博物館に、それら滋賀県埋蔵文化財センターに所蔵されていない、報告書掲載資料の熟覧申請を行う必要があった。

このように、調査報告書掲載資料を2ヶ所に分けて収蔵している理由・事情は筆者にはよくわからないが、一見すると、比較的残りが良い資料が選択されて滋賀県立安土城考古博物館に収蔵されているようである。後述するように、同一個体だが接合しない破片が、異なる番号を付して報告書に掲載されている資料も多く、それらが結果的に分けられて収蔵されている例もあった。このままだと、今回のように、申請をした

者が熟覧するのに多少なりとも手間がかかることになるので、できれば解消いただきたい。

さて、筆者が今回熟覧の対象とし、さらに本稿での報告を考えたのは、おもに「前報告」で有文土器第1群・第2群とされたもので、図版六に掲載されている(図4に再掲載)。これらは縄文時代後期初頭のものであり、第1群は中津式土器、第2群は福田KⅡ式土器～縁帯文成立期土器に該当する。ちなみに、有文土器は第4群まで設定され、第3群はそれらに後続する時期の関東系堀之内Ⅱ式系土器に、第4群は堀之内Ⅱ式と同時期の在り系土器である北白川上層式1期・2期に該当する。数量的には、第4群が圧倒的に多い。

ただし、有文土器第1群・第2群のうち、第六図22は縄文時代晩期後葉の凸帯文土器であるため、今回の対象からは除外した。また、図版七掲載の44は11と同一個体であることが実見の結果判明し、また、同図34は縁帯文成立期のものと考えられることから、今回の報告対象に含めた。

これらのほか、調査報告書未掲載資料中に、掲載資料と同一個体ではあるけれども掲載されていない破片や、口縁部は欠くものの、比較的大きめの体部片で文様構成がある程度判明する破片なども存在した。調査当時の限られた条件下では実測対象とはなりえなかったこれらについても、重要な資料であると考え、今回の再実測の対象とした。

### 3. 仏性寺遺跡出土縄文土器の再実測(図5～7、写真図版1～8)

本章では、再実測した各資料について、型式ごとに具体的にみていくこととしたい。なお、型式認定に際しては、〔石田2008〕・〔千葉2008〕・〔玉田・岡田2010〕・〔小泉2024〕の各文献を参考にした。

掲載番号は、「前報告」に掲載されているものは同じ番号を付し、今回新たに実測を行ったそれらと同一個体と判断されるものには、1a・1bのように「前報告」番号にスモールアルファベットを続けて付した。また、今回新たに実測・掲載した資料は、「前報告」で171まで使用されていることから(1)、201～211の番号を付与した。

なお、これらの土器片の内面にはいずれも注記が認められた。半世紀近く前に記されたもののため消失しているものも見られたが、おおむね良好な状態にあって判別が可能だった。注記は5項目から構成され、一例を示すと「BS-M/(第)54T/黒灰色粘土/780419/656」となる。前3項目はすべて同じであり、第1項目の「BS-M」は「仏性寺遺跡-マキノ町」を示すのであろう。第2・3項目は出土した第54トレンチと黒灰色粘土を、第4項目は出土年月日を、それぞれ示す。第5項目は、別個体と同じものが存在しない(同一個体かつ別破片では同じものが存在するため、整理番号と思われる。ただし、アラビア数字のみのものだけでなく、その前に「R-」を付すものも存在したが、Rが示すところは不明である。

#### 中津I式(1～3・9・10)

「前報告」で有文土器第1群とされたものの一部である。いずれも平口縁であり、口縁部が斜め上方に立ち上がる器形を呈して、口縁端部を丸く収める。中津I式でも新段階に属すと考えられる。

1・2は深鉢であり、接合はしないが胎土・色調・焼成・器面調整・施文技法・器形などの諸特徴が酷似していることから、同一個体と判断した。このうち色調は褐色を呈し、いわゆる生駒西麓産と考えられるものである。復元口径は35.4cmを測る。文様は、口縁に平行する幅2～3cmの2条沈線の磨消縄文帯が右端部で丸く収められるものが横方向に展開するが、1の欠損部の下から右にかけて沈線が残存することから、下位から持ち上がった磨消縄文帯を繰り返すと思われる。3も深鉢であり、1・2よりも口縁端部が肥厚するため、より後出ととらえられる。小破片のため口径は判明しない。文様はJ字文を中心に、幅の一定しない2条沈線の磨消縄文帯が展開すると思われる。

9は「前報告」では浅鉢とされたものである。口縁のラインが若干湾曲するため、浅鉢と判断されたのだろうが、皿に近い器形での外面施文は考えにくく、また口縁端部に屈曲がないため、浅鉢と判断しがたい。2条沈線の磨消縄文帯を展開させる文様構成を持つため本稿でも本型式に含めたが、焼成が比較的硬質で器面調整が丁寧なことなど、諸特徴が本遺跡出土の中津式とは全く異なり、より後出する時期の所産となる可能性がある。

10はほぼ完形の浅鉢であり、口径30.0cm・器高13.4cm・底径8.6cmを測り、底面はやや上げ底である。文様構成は、口縁下に2条沈線の磨消縄文帯を巡らせ、その下に連結して、それぞれ対となる大ぶりのJ字文と中心にJ字を取り込んだ十字状のモチーフを、2条沈線の磨消縄文帯で描く。

#### 中津II式(4～8・201)

中津I式と同じく、「前報告」で有文土器第1群とされたものである。器形はおおむね前段階と同じだが、口縁端部が内面により肥厚する。いずれも横方向に巡る磨消縄文帯が認められるが、小破片のため文様構成は不明である。

4～7は深鉢であり、平口縁の4～6と波状口縁の7がある。「前報告」では、4～6は反転復元で、7は断面のみで、それぞれ示されている。しかし熟覧すると、逆に4～6は反転復元が難しいものだった。とくに6は横方向の湾曲がほとんどなく、口径が非常に大きくなるようだ。一方で7は反転復元が可能で、復元口径は23.0cmを測る。また、これらの中には、内面の器面調整痕が明瞭に認められるものがあり、それらについては拓本で示した。波状口縁の7は、波頂部口縁端部に刺突を施し、その周囲に縄文と1条の沈線を巡らせる。

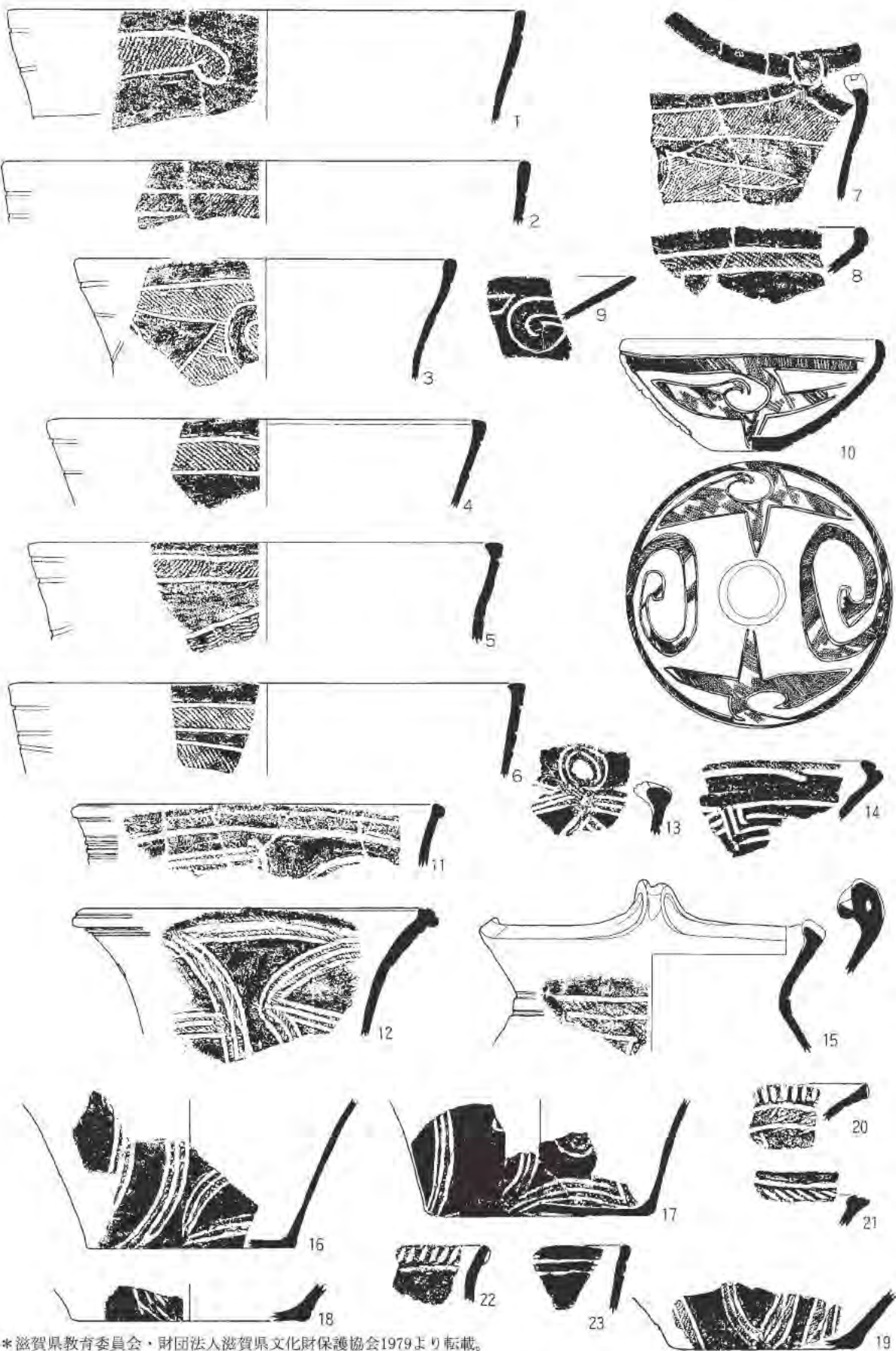
8・201は浅鉢である。ともに平口縁で、口縁端部が内面に肥厚する。外面には幅1.5～2.0cmと比較的細い2条沈線の磨消縄文帯が横方向に展開する。8は復元口径39.0cmを測り、201は内面に条痕調整痕が明瞭に認められる。

#### 中津式体部(202～208)

「前報告」で抽出されなかった資料には、多くの情報を持つ有文土器の体部片が多数含まれ、その中には2条沈線の磨消縄文帯を持つものも少なからず認められた。これらは、口縁部を欠くこともあって厳密な型式比定をしがたい、すなわち中津I式か中津II式かあるいは福田KII式古段階か、不明瞭なものが多いが、できる限り図化に努めた。

202～208はいずれも深鉢であり、屈曲の程度から大まかな部位は判断できる。202・204は口縁部下からゆるくくびれた頸部にかけての部位であり、このうち204は、幅約3cmと幅広の2条沈線の磨消縄文帯により、大ぶりのJ字文を描く。203・205～208は、緩くくびれた頸部からや丸く膨らんだ胴部にかけての部位である。このうち205・207は、幅約1.5cmと細い2条沈線の磨消縄文帯を複数条交錯させるように描いており、文様構成から福田KII式古段階となる可能性がある。以上述べてきた2条沈線の磨消縄文帯の中には、沈線からはみ出した縄文が認められるものも多かった。

図版 六 マキノ町仏性寺遺跡 縄文式土器実測図(Ⅰ) (縮尺1/4)



\*滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1979より転載。

図4 仏性寺遺跡「前報告」図版六

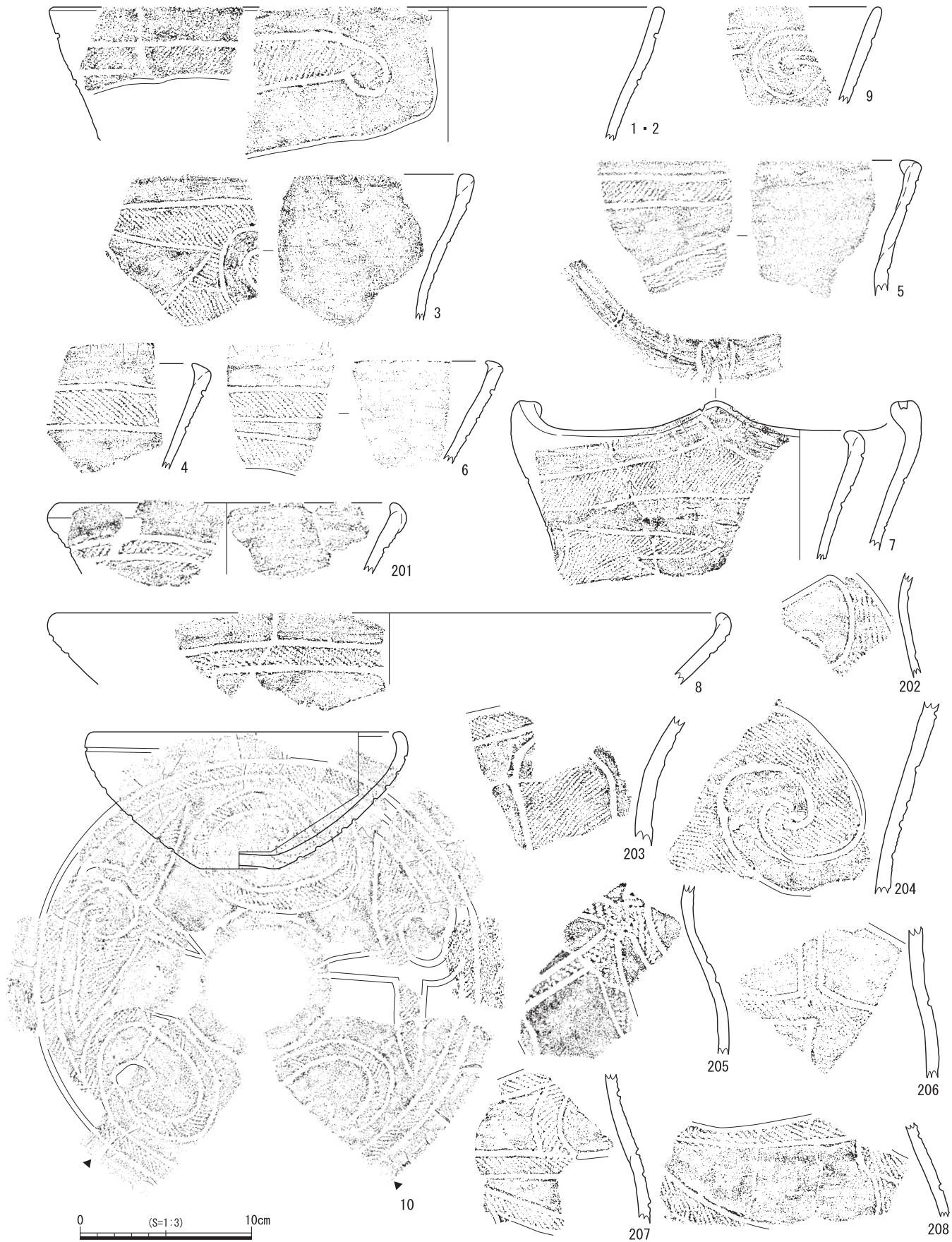


図5 仏性寺遺跡第54トレンチ 縄文土器①(中津式)

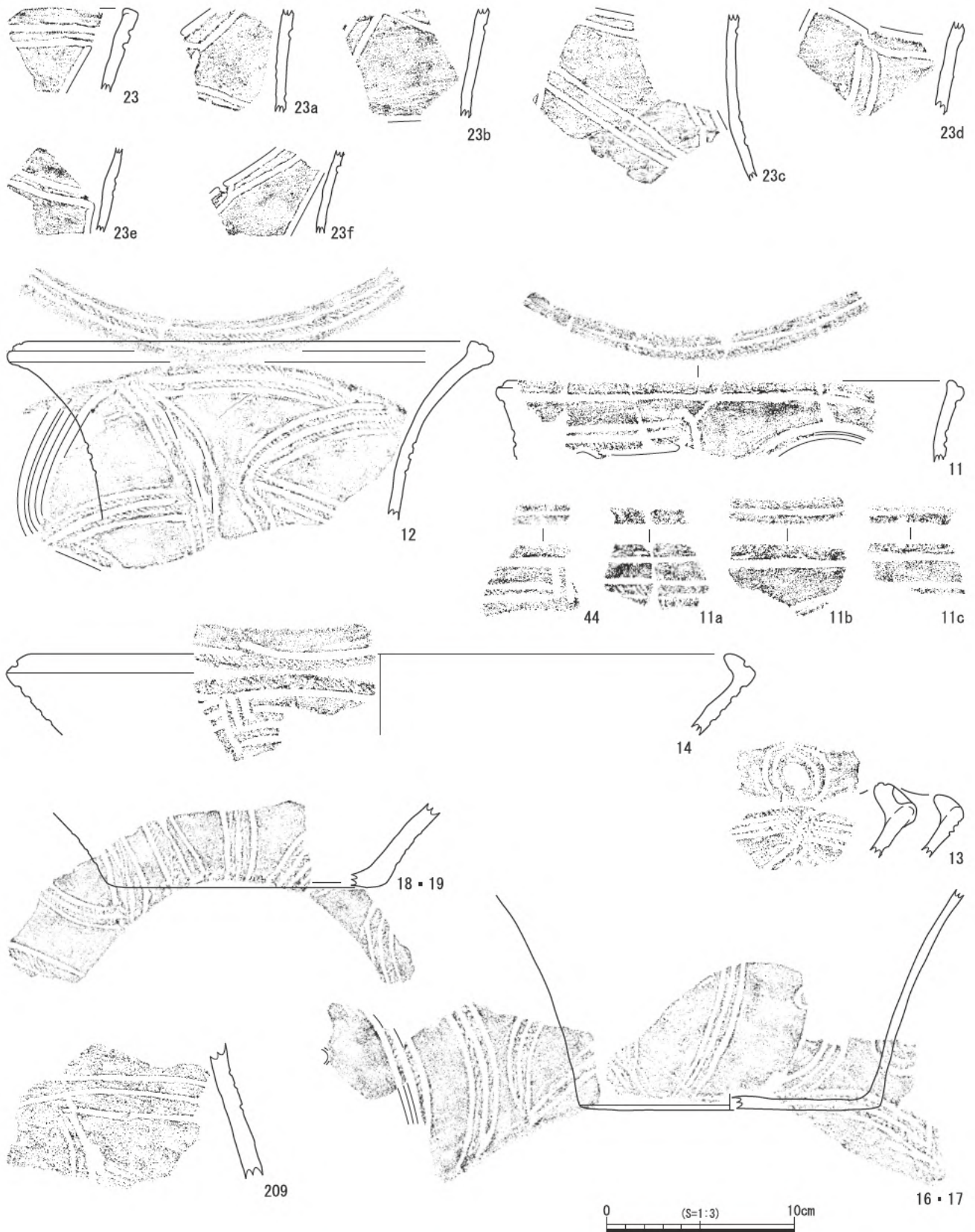


図6 仏性寺遺跡第54トレンチ 縄文土器②(福田KII式)

## 福田KⅡ式古段階(23)

「前報告」で有文土器第2群とされたものである。本段階の特徴は、口縁端部がさらに肥厚し、2条沈線の幅狭の磨消縄文帯を持ち、沈線の屈曲部が鈎状を呈するなどである。23は平口縁の深鉢であり、口縁端部断面が方形を呈するもので、外面には縄文を伴わない幅狭の2条沈線で文様を描く。未抽出資料に23の同一個体の体部片6点が含まれていたため、これらも図化・掲載した。「前報告」同様、位置づけが難しいが、沈線の接点で鈎の手状になるものが23a・23d・23fに認められるため、本稿では本段階に位置づけた。いずれの破片も接合しないため、器形は不明である。また、無文部分には条痕調整痕が明瞭に認められる。このほかに当該期に位置づけられるものはなかった。

## 福田KⅡ式新段階(11~14・16~19・44・210)

福田KⅡ式古段階と同じく、「前報告」で有文土器第2群とされたものである。3条沈線の磨消縄文帯による施文を特徴とする。本稿で示したものは、小破片が多いこともあり、器形が不明瞭なものが多い。

11は平口縁深鉢と思われ、「前報告」で北白川上層式とされた44は同一個体である。そのほか、未抽出資料中に同一個体の口縁部片が多数含まれていたため、そのうちの残存状態が良好な4点の拓影も示した。肥厚した口縁端部の上面と外面に各1条の沈線を巡らせ、外面には3条沈線の磨消縄文帯による文様を描くが、部位が限られるため文様構成は不明瞭である。12は鉢であり、肥厚した口縁端部に2条沈線の磨消縄文帯を巡らせる。外面に3条沈線の磨消縄文帯により文様を描くが、その構成は縦方向にくの字・逆くの字を描いて区画を作り、区画内でそれらの屈曲部を横方向の直線状磨消縄文帯でつなげるほか、口縁端部直下では区画同士を横方向の直線状磨消縄文帯でつなげる。

13は小規模な波頂部を持つ波状口縁であり、器形は不明瞭である。波頂部の端部上面には指頭による凹みを持ち、その周囲を2条の沈線が巡る。外面には3条沈線の磨消縄文帯により文様を描く。14は鉢と思われ、本稿掲載にあたり反転復元を行った。内面に肥厚した口縁端部に、途切れさせた沈線および縄文を巡らせる。口径約36.8cmを測る。

16・17および18・19は、それぞれ接合はしないが同一個体である。16・17は器壁が約5mmと比較的薄く、底面はほぼ平滑で鉢と思われる。弧を描く3条沈線の磨消縄文帯を縦方向に複数条描き、それらの下端部を横方向の弧状を呈する磨消縄文帯で連結する箇所もある。底径約16.0cmを測る。18・19は器壁が約10mmと比較的厚く、体部の立ち上がりが非常に緩いため浅鉢と考えられる。底面は上げ底状を呈し、地面と接する外縁部は使用による荒れが著しい。16・17同様に縦方向に弧を描く3条沈線の磨消縄文帯を複数条描き、その下端部が接する箇所もある。底径約28.0cmを測る。

209は今回新たに図化・掲載した深鉢の体部片である。頸部下の部位と考えられ、縄文を伴わないものの、3条沈線を横位あるいは斜位に施すことから、本段階に位置づけた。

## 縁帯文成立期(15・20・21・34)

前半の四ツ池式・広瀬土坑40段階と後半の芥川式があり、当遺跡では資料数が少ない。20は口縁端部に刻みを施し、その下に2条沈線の磨消縄文帯を巡らせる。34は内面に肥厚した口縁端部に2条の沈線と刻みを持つ。15・21・210・211はいずれも頸部に無文帯を持つ深鉢であり、芥川式に該当しよう。15は波状口縁を呈する深鉢であり、縦方向の橋状把手を付する大波頂部と突起状の小波頂部を1対ずつ持つ。胴部は、残存部だけだと3条沈線の磨消縄文帯と見えるため、「前報告」では福田KⅡ式とされている。そのほかは、肥厚した口縁端部に沈線や刻み、指頭による穴を施す。

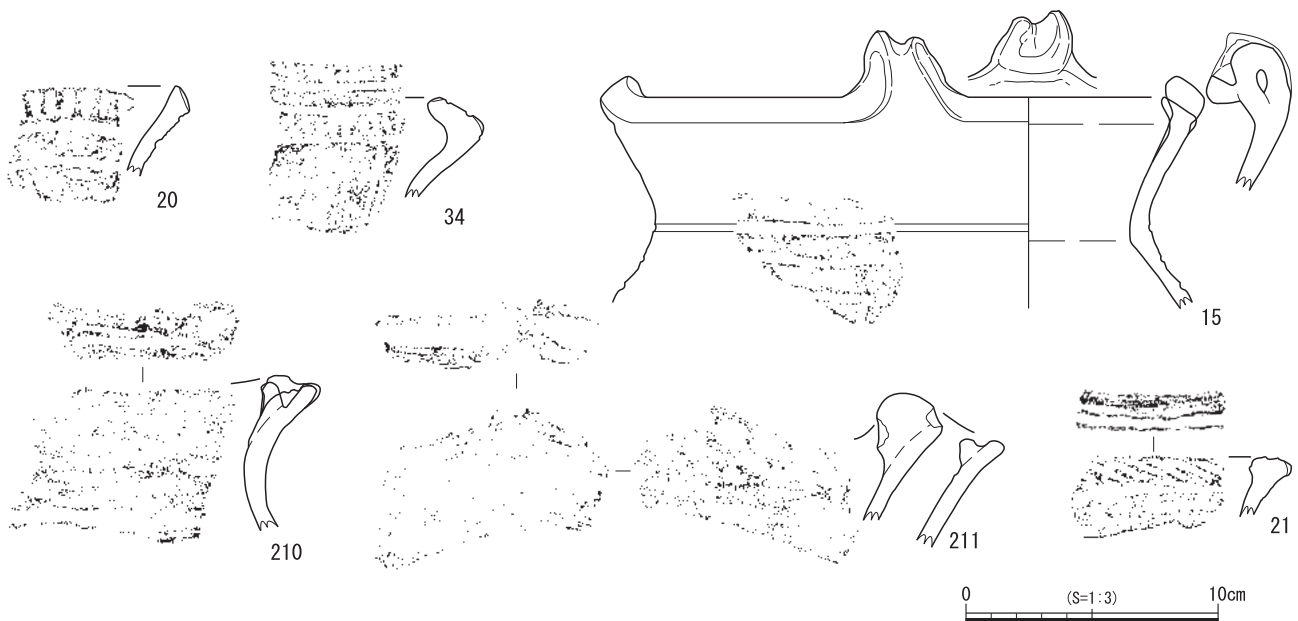


図7 仏性寺遺跡第54トレンチ 縄文土器③(縁帯文成立期)

#### 4.おわりに

以上、報告してきた仏性寺遺跡第54トレンチ黒灰色粘土出土の縄文時代後期初頭の土器について、簡単にまとめておきたい。大半が破片資料ではあるものの、文様や器面調整が明瞭に残る、遺存状態が良好な資料が多く存在する。また、各時期に、反転復元が可能だけの破片の大きさが残存し、器形・文様構成がある程度判明するものが認められる。とくに、中津I式の浅鉢である10や同II式の波状口縁深鉢である7、福田KII式新段階の鉢である12や16・17、浅鉢である18・19、縁帯文成立期の波状口縁深鉢である15などは、当該期の近江=滋賀県を代表する資料として扱えるものである。

数量的には、中津式が比較的多く、福田KII式・縁帯文成立期と時期が下がるにつれて減少していく傾向が認められる。さらに、本稿では扱わなかった北白川上層式1期・2期で大きく増加するが、これは近江における当該期の遺跡数・出土資料数の増減傾向と同じである〔小島2026〕。

今回、これらの資料について、このように改めて実測を行って公表することができ、少なからず縄文時代後期の土器研究に資することができたと思う。今後も、本稿で再検討を行った縄文時代後期初頭を挟んだ、縄文時代中期後葉から後期前葉にかけての近江の縄文時代社会・文化の移ろいを、丁寧に紡いでいく努力を続けていきたい。

#### 〔謝辞〕

仏性寺遺跡出土資料の実見に際しては、滋賀県埋蔵文化財センター小竹詩織氏、滋賀県立安土城考古博物館藤崎高志氏に大変お世話になりました。文末ながらお礼申し上げます。

#### 〔追記〕

令和6年2月6日に父が亡くなった。83歳だったが家族にとっては早すぎる死だった。直接の死因は、前年末に感染した新型コロナウイルスだったものの、半年ほど前から思うように食事を摂れなくなり、1日の大半をうとうとして過ごすようになっていたから、本人も遠からず死期が訪れることを予想していたとは思ふ。

幼い時に父を亡くし、勉学も含めて思うように生きられなかった分、我が子達がそれぞれ好きな道に進むことを喜んでいてくれたようだった。家族に対しては寡黙であったから、いつかじっくりと昔のことなど聞いてみたいと思っていたが、気が付いた時にはもうそんな会話を交わせる状態ではなくなっていた。

父は、私が考古学を学ぶために家を出て進学することや、人より余分に学びたいという希望を、二つ返事で認め、応援し続けてくれた。経済的なことだけでなく、気持ちの上でも多くの負担をかけたことについて、結局、感謝も謝罪もできなかった。

本稿は、捧げるほどの内容ではないことは十分承知の上で、それでも好きな考古学に携わりながら生きている今の自分を、もう近くにはいない父に見てもらいたいと思って書いたものである。

#### 註

(1) ただし、仏性寺遺跡の資料は1~154のみであり、155~161は翌1980年に報告された上開田遺跡出土資料〔滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1980〕、162~171は1984年に報告された北仰遺跡(現北仰西海道遺跡)出土資料〔滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1984〕である。

#### 文献一覧(著者名・機関名50音順、刊行年順)

- 石田由紀子(2008)「中津式・福田KII式」『総覧縄文土器』小林達夫編、アム・プロモーション
- 小泉翔太(2024)「近畿地方における後期前葉土器群の編年」『東海縄文研究会第19回研究会(静岡大会)・第3回シンポジウム併催 東海からみた後期前葉土器群』東海縄文研究会
- 小島孝修(2001)「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き―地域の検討6.湖西北部地域―」『紀要』第14号、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 小島孝修(2026)「近江における縄文時代後期初頭土器の様相」『千葉豊退職記念論集』千葉豊退職記念論集刊行会(刊行予定)
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1979)『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書VI-3』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1980)『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書VII-1』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1984)『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XI-2』
- 玉田芳英・岡田憲一(2010)「II各地域の土器編年5 近畿」『西日本の縄文土器 後期』千葉豊編、真陽社
- 千葉豊(2008)「縁帯文土器」『総覧縄文土器』小林達夫編、株式会社アム・プロモーション
- 中村健二・小島孝修(1997)「近畿地方の中・後期土偶」『西日本をとりまく土偶 発表要旨集(土偶シンポジウム6 奈良大会)』「土偶とその情報」研究会編
- 山口順子(1979)「60.高島郡マキノ町仏性寺遺跡出土の田下駄」『滋賀文化財だより』No.32、財団法人滋賀県文化財保護協会

#### 挿図典拠

- 図1 大日本帝国陸地測量部二万分一地形図「剣熊村」「海津村」をベースマップとして筆者が作成。
- 図2 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1979掲載図および報告文から筆者が再構成。
- 図3 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1979付図を25%縮小して再掲載。
- 図4 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1979図六を原寸で再掲載。
- 図5~7 筆者実測。
- 写真図版1~8 筆者撮影。

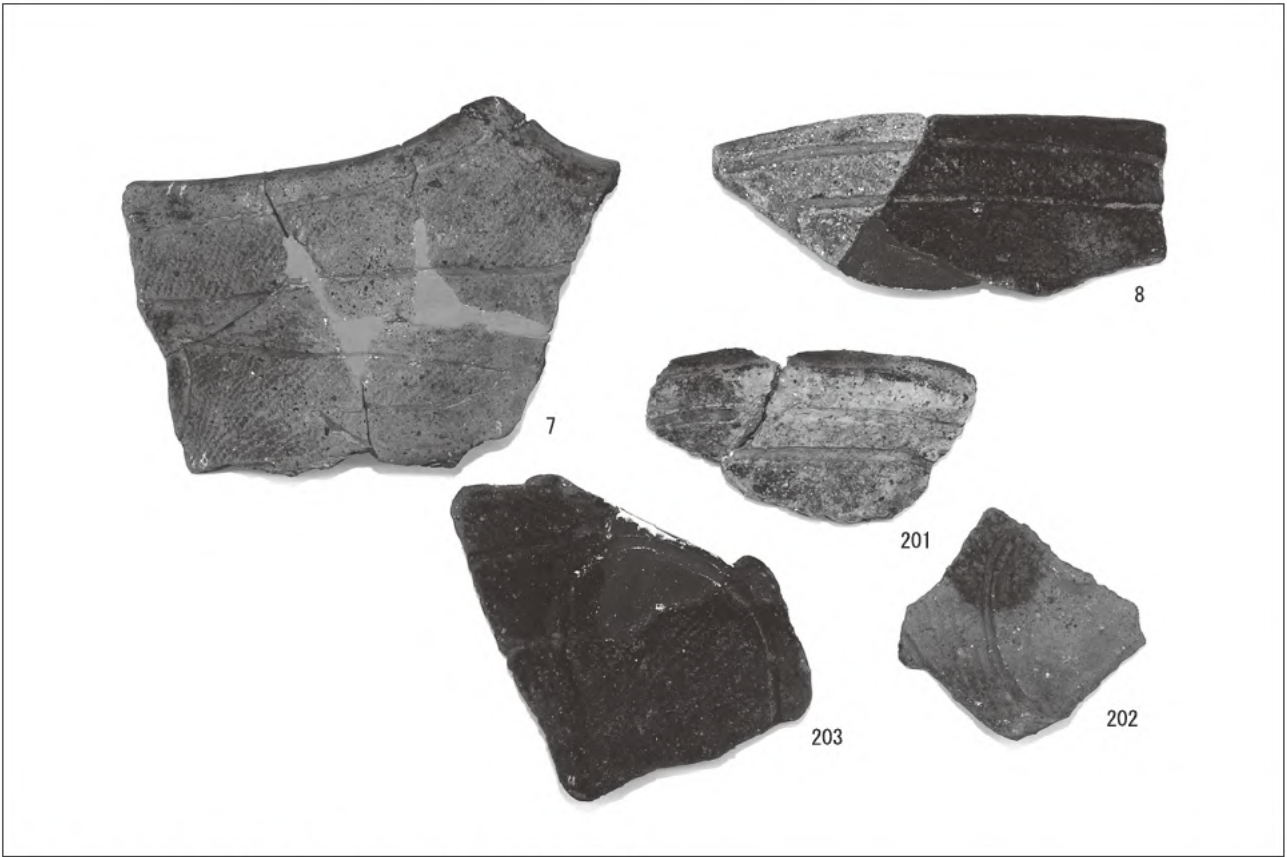
(こじま たかのぶ：企画整理課 主幹)



写真図版1 高島市仏性寺遺跡出土縄文土器 1~6・9



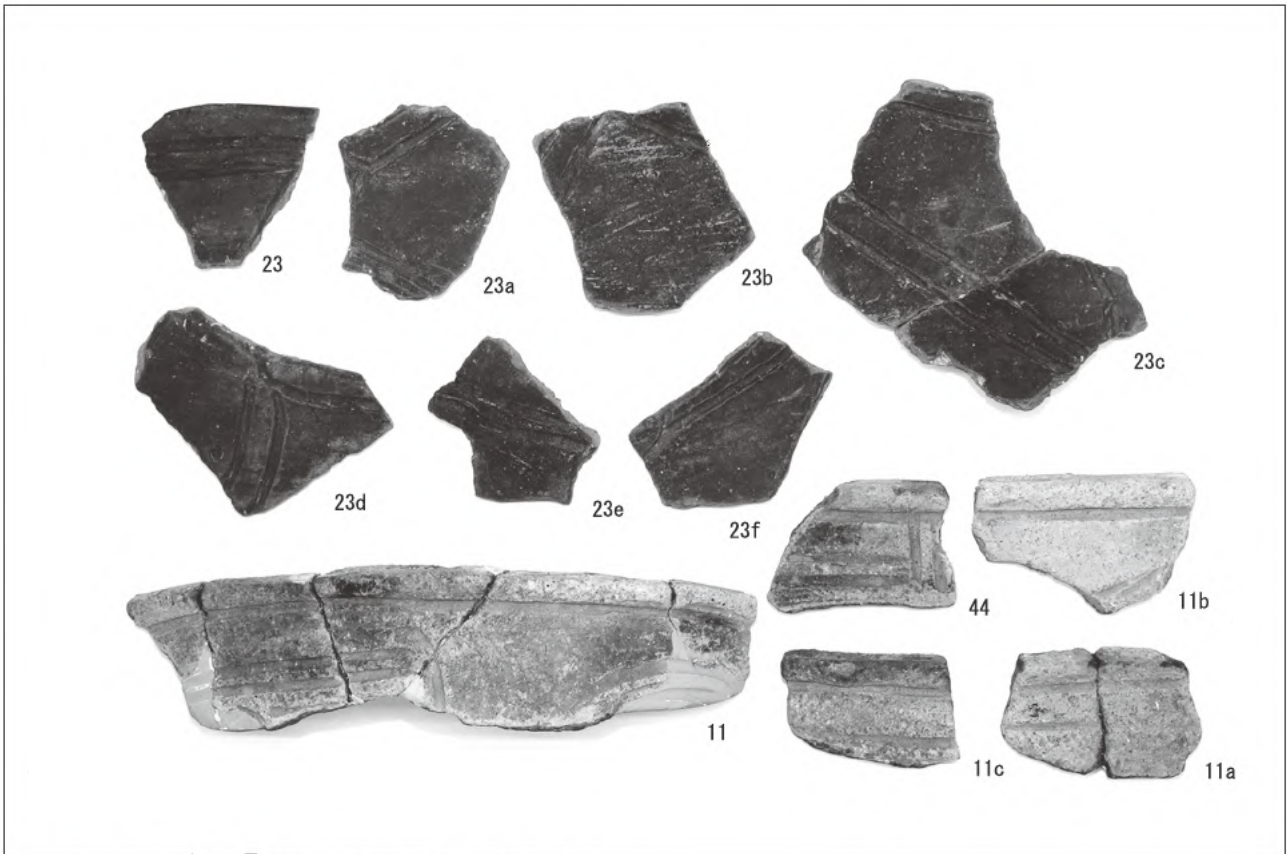
写真図版2 高島市仏性寺遺跡出土縄文土器 10



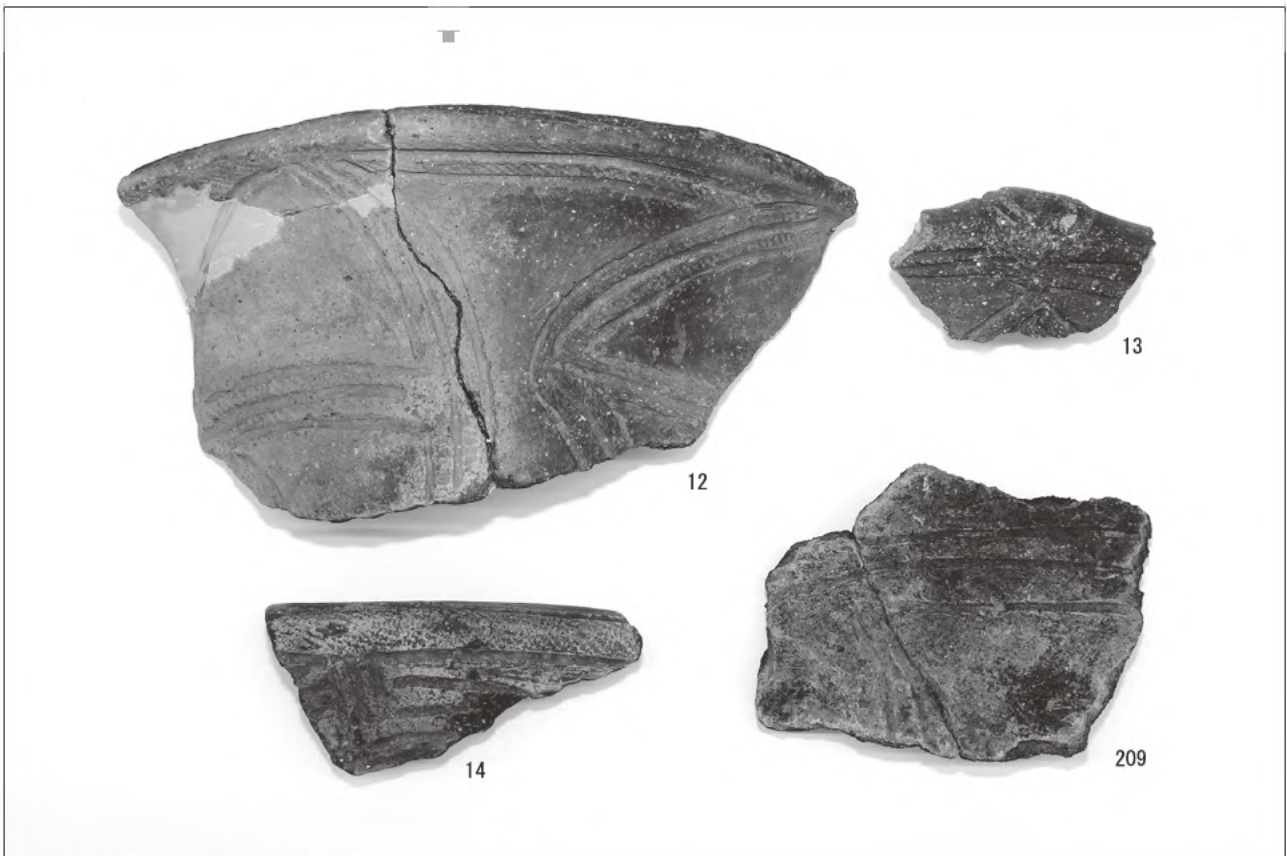
写真図版3 高島市仏性寺遺跡出土縄文土器 7・8・201~203



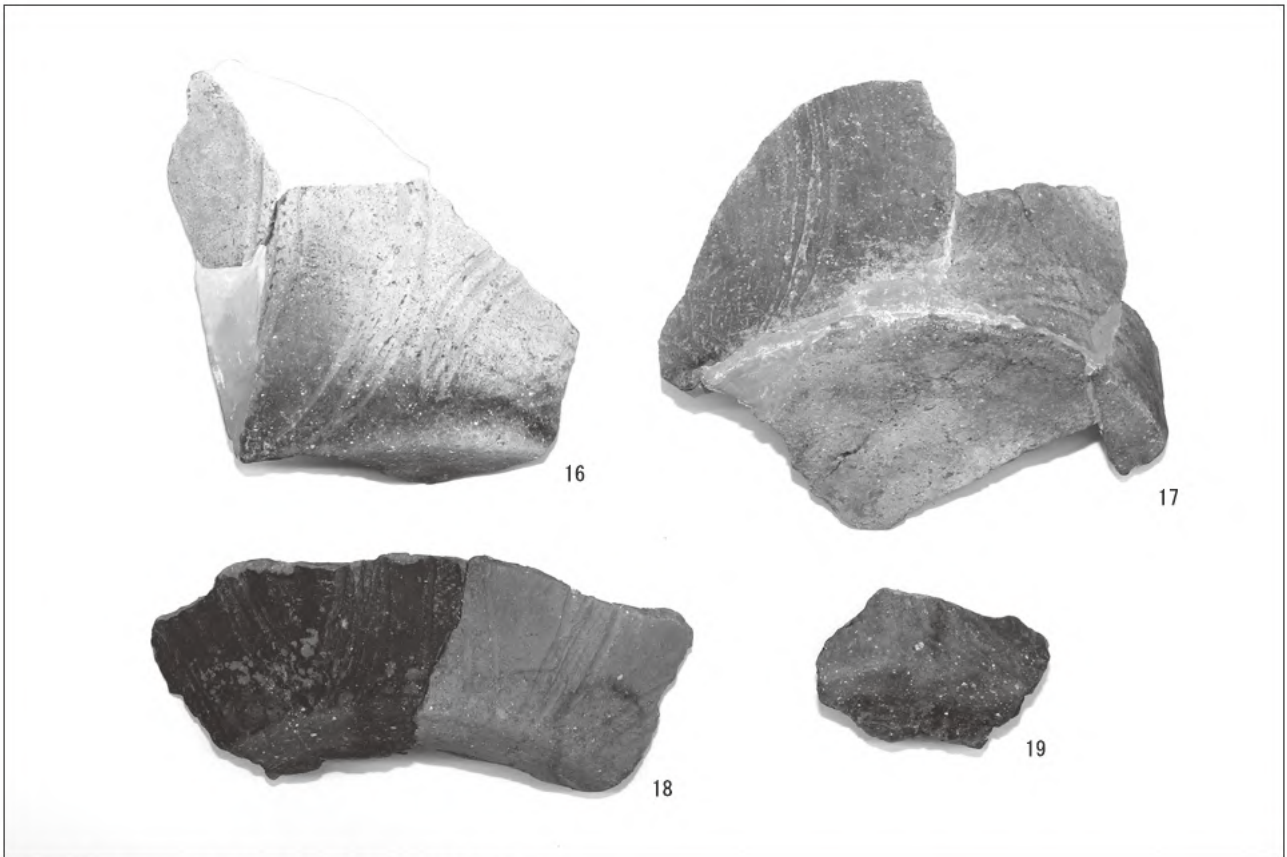
写真図版4 高島市仏性寺遺跡出土縄文土器 204~208



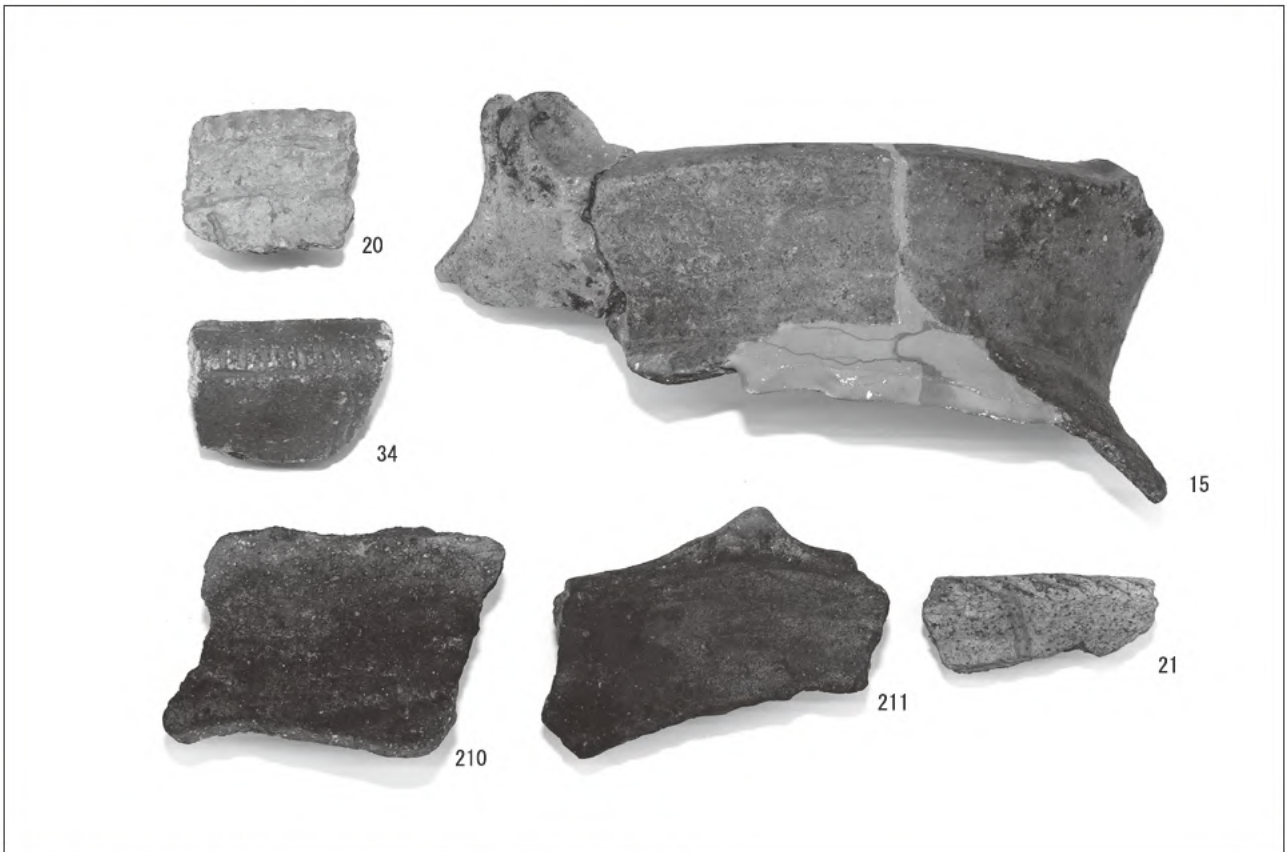
写真図版5 高島市仏性寺遺跡出土縄文土器 11・23・44



写真図版6 高島市仏性寺遺跡出土縄文土器 12~14・209



写真図版7 高島市仏性寺遺跡出土縄文土器 16~19



写真図版8 高島市仏性寺遺跡出土縄文土器 15・20・21・34・210・211

**ANNUAL BULLETIN**  
**of**  
**Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage**  
**Vol.39 2026.3**

私たちは文化財をとおして  
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会  
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages